IRATSUME 5:25-27(1981)

但馬におけるウスイロヒョウモンモドキの分布について

谷角素彦*

1. 概観

ウスイロヒョウモンモドキ（*Melitaea diamina* LANG）は、国外では中国西部と朝鮮半島の一部にも分布し、日本では中国山地の高原（兵庫・岡山・鳥取・島根・広島各県）に局部的にしか分布せず、昔、日本列島が大陸と陸続きだったことを裏付ける生物としてよく話題にされる。兵庫県下では、段ヶ峰、砥峰、峰山、久崎など県中央部からも知られるが、但馬地方では、鉢伏、杉ヶ沢などに産し、兵庫県の蝶相を考えるうえでも重要な種となっている。すなわち、兵庫県はこの蝶の分布東限にあたるわけで、もう少し詳しくいうと、朝来郡生野町にある段ヶ峰が分布の東端とされるが、但馬では、村岡町耀山（かがやま）（金山峠西斜面）が現時点でのその東限になっている。

この蝶の棲息地は、その殆どが標高200～900M、の火山性乾性草原で適度の拡がりをもった所とされ、但馬地方では、鉢伏、杉ヶ沢、扇ノ山（上山高原他）、兎和野、金山峠が、その既知産地のすべてである（図1）。兎和野では、1980年7月13日、集会広場横の斜面を上がった草地にて確認している。**

2. 棲息地での状況

ウスイロヒョウモンモドキの特徴として、局地的分布をするが、棲息地では個体数が多いことがあげられる。事実、1970年頃の扇ノ山や杉ヶ沢では、歩けば足下から湧いてくるという形容がぴったりくるぐらいこの蝶の姿が見られた。しかし、今日の但馬の産地では、もはや、こうした状態

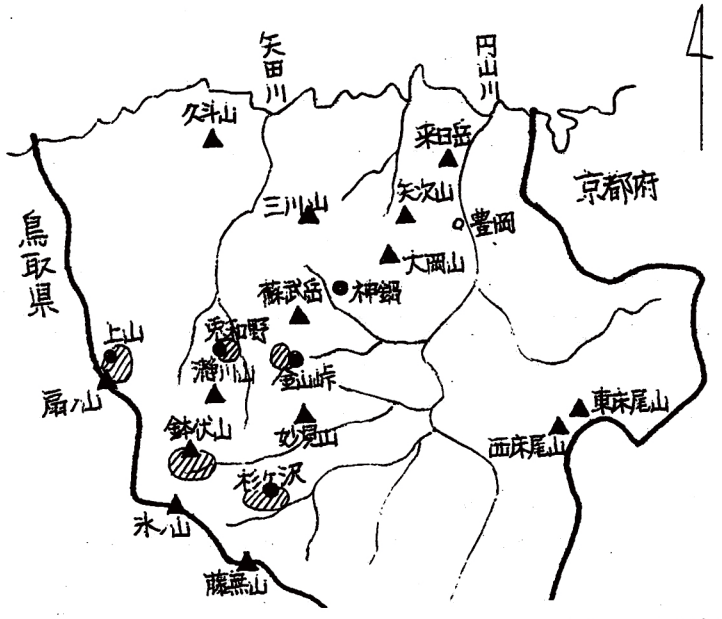

図1. 但馬地方のウスイロヒョウモンモドキ棲息地(斜線部)

* 現住所　〒567　茨木市

** 加野正氏、島田真輔氏、谷角によって3♂♂3♀♀が採集されている。

は夢物語となってしまった観が強い．かつてのウスイロヒョウモンモドキの楽園、鉢伏、杉ヶ沢、扇ノ山の今日は、その最盛期でさえその姿を散見できる程度になってしまっている．この蝶は、飛翔力が弱く、発生地から遠く離れることも少ないようなので人為的影響を受けやすいことが大きく関係していよう．個体数減少傾向はどの産地についてもいえるようである．

扇ノ山については、この地に通いつめた安達留二郎氏よりその現状を聞いている．それによると、上山高原を中心に畑ヶ平高原、石橋地区、鳥取県側の河合谷高原などに棲息しているが、この蝶の数がもっとも多い上山高原でも大幹線林道が貫き、登れば必ず自動車が通過する有様で、心ない蝶マニアの乱獲と相俟って年々減少の一途を辿っているとのことである．

兎和野では、本来は高原一帯に分布していたものが、キャンプ場、野外教育センター建設、開墾などによって草原としての環境が損なわれ、良好な自然状態を残した一部の場所に棲息域が狭められたのが現在の姿とみなすのが妥当であろう．

杉ヶ沢は、高原の西方一帯73haが県営パイロット事業として開墾されたこと、鉢伏もスキー場、キャンプ場、レジャー施設の増加などの原因で、またどちらも産地として有名になり過ぎ採集者が多く入るようになったことでウスイロヒョウモンモドキは激減している．

分布東限の地、金山峠西斜面はどうだろうか．ここでは、牛の放牧に利用するために火入れや採草などの手が加えられ、草原の維持が行なわれている．また1963年に最初の1頭が採集され、1978年に再確認されるまでは、採集という側面からのマイナス要素もなかったと予想されることからこの地は、ウスイロヒョウモンモドキの棲息にとって環境は安定していたといえよう．しかし、妙見山側から延びてきた林道が、1980年、遂に金山峠を通過したことで、この蝶の生存に大きな暗い陰が落とされたことは、他産地での例に洩れない．林道が貫通した峠付近の尾根には、この蝶の食草であるオミナエシが集中して生えており、工事によってこれらがどうなったか気に掛かるところである．

3. 分布東限問題

現時点での知見では、金山峠西斜面の草原が但馬での分布東限である．果たしてこれより東側にはウスイロヒョウモンモドキはいないのだろうか．筆者のもっとも興味ある点でもある．この問題を考えるためには、この蝶の抱えている歴史*、分布のひろげ方、そしてこの地方の地史を明らかにする必要があるが、

* 日本産草原蝶は自生的なものではなく、大陸において草原性の属として確立したのち優勢な広分布種を産み出し、それが日本にも波及し、その侵入時代は日本に草原的環境がひろがった第四紀の氷期と考えられる（日浦、1971）．

文献、足で稼いだデータ共に乏しく確かなことはいえない．そこで、ここではいくつかのケースを想定して今年以降の活動につなげたい．

先ず、金山峠が分布東限でこれより東には分布しないとする考え方である．この根拠は、金山峠の草原は安定した状態で保たれているにかかわらず個体数が他産地に比べ少ないことから、まだ棲息地として充分な形で定着しきっていない状態にあると考えることである．谷ひとつ隔てた西側の鉢伏山塊、さらに谷ひとつ越えた扇ノ山山塊では、古い記録をみても個体数は多く棲息地として完全な地位を獲得しているといえるが、金山峠は、これらの山域からやってきたものが根を下し始めた段階とみなす考え方である．

次の考え方は、もともとは金山峠より東側にも分布をひろげていたものが、何らかの要因で姿を消してしまったというものである．或いは、その棲息地が非常に狭められ限定されてしまい、未だ発見されていないというものである．金山峠から東へ目を転じてみると、神鍋高原、大岡山、矢次山、来日岳と400～700M.クラスの山々が円山川につきるところまで連らなっている．このうち広大な乾性草原を有した神鍋高原と大岡山が気になる存在としてクローズアップされてくる．ただどちらもスキー場、ゴルフ場、別荘地等のための開発が進んでおり、ウスイロヒョウモンモドキが棲息するに充分な自然環境がどの程度残されているのか疑問であるが、兎和野のような例もあるし是非ともたん念に調べてみなければならない地域である．なお、神鍋山は県下でもっとも新しい火山で、地史的に中国山地と別のものと考えられ、ウスイロヒョウモンモドキの分布形成と何らかの関連を見出せるかもしれない．

金山峠より西側での産地を地図上にプロットしてみても穴だらけという印象を免れえない．この地域のより詳細な分布調査ぬきで分布東限問題は論じれないだろうし、ウスイロヒョウモンモドキと乾性草原の関係といっても具体的に示されているものではない．食草となるオミナエシ、カノコソウの分布との結びつき、草原の植生を具体的に表わし、そこからこの蝶の棲息条件をわりだしていくことは、分布東限問題を考えていくうえでも有力な手段となるであろう．

参考文献

日浦勇、1971．日本産蝶の分布系統．日本鱗翅学会特別報告第5号：82